『語学研究所論集』第 13 号 (2008), pp.43-76

人名詞と動詞とのくみあわせ（試論）

―連語のタイプとその体系―

早津 恵美子

1. はじめに

言語学研究会編(1983)におさめられている諸論文は，奥田靖雄氏の理論にもとづいてなされた連語・連語論の研究といってよいだろう（鈴木・鈴木 1983）．そこでは，特定の格の名詞と動詞とのくみあわせ（ヲ格の名詞と動詞，ニ格の名詞と動詞，など）がひとつひとつとりあげられ論じられている．それがおそらく正統な連語論なのであろう．しかし本稿は，それとは異なるしかたで，すなわち，特定の意味の名詞，具体的には人をしめす名詞と動詞とのくみあわせを，名詞の格のちがいにかかわらずとりあげて，それらの相互関係や体系性を考えてみようとする試みである．

宮島(2005:pp.26-30)は，“奥田連語論の中心的な理論に「カザラレ[1]の優位性」ということがある”とし[2]，カザラレ中心の連語論の長所をあげている．長所のひとつに，「門をでる，門からでる」「アメリカを旅行する，アメリカで旅行する」のような“類義格表現の比較ができる”ということがある．これら相互の異同を考えようとするとき，たしかに宮島(2005)のいうように，“カザリ名詞中心の記述では，バラバラに処理するしかない”ことになり，異なる格の名詞と動詞とのくみあわせは“べつの章でとりあげられるだけでなく，ばあいによっては，べつの人によって分担される”ことになる．ただ，言語学研究会編(1983)でも，上述

---

[1] 二つの単語（自立語）のくみあわせには，陳述的なむすびつき（predicative：「犬が走る」），従属的なむすびつき（subordinative：「枝をおる」「木にのぼる」），並列的なむすびつき(coordinative：「父と母」)を表わすものがあるが，奥田氏の連語論ではこのうち従属的なむすびつきのみを連語とみなす．従属的なむすびつきを表わす連語は，軸になる単語（他の単語を従属させる構成要素）とそれによりかかる単語（他の単語に従属する構成要素）とからなりたっている．そして，前者が「かざられ」，後者が「かざり」とよばれる．「枝をおる」「木にのぼる」では，「おる」「のぼる」が「かざられ」，「枝を」「木に」が「かざり」である．

[2] ただし宮島氏は，この原則が奥田連語論において必ずしもつらぬかれていないのではないかとしていくつかの指摘をする．そのひとつとして，奥田（1968-1972[1983]）における「第一章対象へのはたらきかけ」の各節が，かざられ動詞の意味によってではなく，かざり名詞の意味によって，「物にたいするはたらかきかけ」「人にたいするはたらかきかけ」「事にたいするはたらかきかけ」の三つに分けられていることをあげている．そして宮島(2005)は，この第一章も動詞中心に分類する修正のこころみを簡単にではあるがしめしている．「カザラレの優位性」という奥田連語論の“理論の一貫性をたもつため”(p.28)には，おそらくその方向がよいだろう．

のように，ひとつひとつの論文は特定の格の名詞と動詞とのくみあわせが問題にされるので，「門をでる」と「門からでる」，「アメリカを旅行する」と「アメリカで旅行する」は，まずはやはり別の論文として，それも前者は異なる人によって論じられている[3]．

また，鈴木・鈴木(1983:p.14)も，宮島のいう“類義格表現の比較”とは異なる方向からだが，さまざまな連語は“相互に対立しながら，相互におぎないあいながら，連語の体系をなしているのである”として，「まるたをくむ」と「まるたでくむ」，「やぐらをくむ」と「やぐらにくむ」，「神田でかう」と「神田にかう」，「まめをたべる」と「まめでたべる」，「学校からかえる」と「学校までかえる」，「木曽路にいく」と「木曽路をいく」という興味深い対があげられている．しかしやはりこれまでのところ，これらの相互関係・体系の全体が，連語論として積極的に論じられたことはおそらくない．すべての名詞と動詞とのくみあわせを対象にしてその体系性を明らかにすることはあまりに複雑になるからであろうか．

そこで，連語論（奥田連語論）の本質からははずれることになるだろうが，一定の意味の名詞に限定して，それと動詞とからなる連語の相互関係・体系性をさぐれないかと考えた．そして本稿では，人をしめす名詞に限定し，人名詞と動詞からなる連語を対象にして連語のタイプをとりだし，それらの相互関係や体系性をさぐることを試みた．ただしその際，“連語はかざられになる動詞がかざりになる**単語**とくみあわさるのではなく，かざりになる**単語の文法的なかたち**とくみあわさるのである．”（鈴木・鈴木 1983:pp.13-14，下線は早津)という点は大切にすることにし，まず名詞の格形式に注目し，格形式ごとに動詞とのくみあわせをみていくことにする．考察の対象を人名詞と動詞との連語にすることで，人間と人間とのかかわり方の種々相の反映としての連語の相互関係や体系がみえてくるのではないかと考える．

2. 人名詞のしめす「人」の人格性

本稿は人名詞と動詞とからなる連語を考察対象にするのだが，人名詞といっても，当該の連語においてそれが意志や感情や判断力をそなえた存在としての人間，つまり人格的な存在としての人間をしめす名詞であるものについて考察する．そのことについて，まず述べておく．

人名詞と動詞とのくみあわせには，次のように，人名詞の格形式が，ニ格，ト格，カラ格，ヲ格，デ格，ヘ格，マデ格のものがある[4]．

---

[3] 奥田(1968-1972[1983:p.144])では，「門をでる」のような“はなれるところをあらわす連語”のヲ格名詞のはたらきが「門からでる」のカラ格にきわめてちかいことが述べられているが，渡辺(1966[1983])，荒(1975[1983])では何も述べられていない．

[4] ガ格の名詞と動詞とのくみあわせ（陳述的なむすびつき）は考察の対象としないことについ

(1) a こどもに手伝いをたのむ
　b 通行人に近づく，　通行人に気づく
(2) a ともだちとけんかする
　b 通行人とぶつかる，　兄とくらべる
(3) a 先輩から本を借りる
　b 男子学生からなる集団
(4) a こどもをおだてる
　b こどもをかかえる，　母を思い出す
(5) 教室が新入生でうまる，　酒癖の悪い夫で苦労する
(6) 両親へ小包をおくる
(7) 希望時間を係員まで申しでる

これらのうち，どのようなものを本稿の考察対象とするかについて，以下二つに分けてみていく．

（1）ニ格，ト格，カラ格，ヲ格，デ格の人名詞

これらのうち，(1)a，(2)a，(3)a，(4)a の連語における人名詞（「こどもに」「ともだちと」「先輩から」「こどもを」）は，意志や感情や判断力をそなえた存在としての人間，つまり人格的な存在としての人間をしめす名詞としてそれぞれの動詞とくみあわさって，人間とのかかわり方を表わす連語をつくっている．

しかしながら，人名詞ではあっても，(1)b，(2)b，(3)b，(4)b，(5)の場合は，意志や感情や判断力をそなえた存在としての「人間」というよりは，むしろ物や事に相当する非人格的な存在としての「ヒト」としてその連語の要素となっている．これらにおける人名詞（「通行人に」「通行人と／兄と」「男子学生から」「こどもを／母を」「新入生で／夫で」）はそれぞれ，動詞のしめす意味との関係において，次のような連語における物名詞や事名詞のそれと同じだと考えられる．つまり，それぞれの括弧内に記したような文法的な意味である．

(1)'〔通行人に／壁に〕近づく　（接近の対象）
　〔通行人に／物音に〕気づく　（認知の対象）
(2)'〔通行人と／電柱と〕ぶつかる　（相互接触の相手）
　〔兄と／輸入品と〕くらべる　（比較の対象）
(3)'〔男子学生からなる集団／十部屋からなる旅館〕　（構成要素）
(4)'〔こどもを／荷物を〕かかえる　（接触の対象）
　〔母を／学生時代を〕思いだす　（再生活動の対象）
(5)'〔新入生で／花で／会議で〕うまる　（ものをみたす材料）

ては，注 1)参照．

〔酒癖の悪い夫で／お金で／商売で〕苦労する　（ことがらの原因）

本稿は人間と人間とのかかわり方の種々相を考察しようとするものであるから，人格的な存在としての「人間」をしめす人名詞と動詞とのくみあわせを考察の対象とし，(1)b，(2)b，(3)b，(4)b，(5)のようなくみあわせはとりあげない．これらの連語に具体的にどのようなタイプがあるのかは，稿末に資料としてあげることにする．

なお，「バッハをきく」「漱石をよむ」のような換喩的な使用のものも，人名詞がしめすのはもちろん人格をもった存在としての人間ではなく，臨時的にそれぞれのつくった作品をしめしているのであるから，考察の対象とはならない．

（2）へ格，マデ格の人名詞

上のような性質のニ格，ト格，カラ格，ヲ格，デ格の名詞と動詞とのくみあわせに加えて，へ格とマデ格の人名詞と動詞とのくみあわせも本稿ではとりあげないのであるが，それについては，上の場合とは異なる事情がある．

へ格の名詞と動詞とのくみあわせについては渡辺(1963[1983])の研究，マデ格の名詞と動詞とのくみあわせについては井上(1963[1983])と荒(1977[1983])の研究があり，そこでは人名詞に限らず，へ格とマデ格の名詞を広く対象にして考察されている．人名詞がかざりになる連語としては，へ格には《ゆずり相手のむすびつき》と《はなし相手のむすびつき》[5]があり（(8)と(9)），マデ格には《はなし相手のむすびつき》がある（(10)と(11)）．

(8) ちょいちょい町の人達へ金を**貸しつけたり**して，夫婦は財産の殖えるのを楽しんだ．（あらくれ，渡辺 1963[1983:p.347]の例 51）

(9) この変化にともなって，平岡へは手紙を**書いても**書かなくても，まるで苦痛を覚えないようになってしまった．（それから，渡辺 1963[1983:p.348]の例 63）

(10) 特設クラスを教えてもいいという先生は，校務主任まで**申し出る**こと．（人間の壁，井上 1963[1983:p.436]の例 48）

(11) かねて半蔵まで**申し込んであった**妹お民が三番目の男の子を妻籠の方へ連れて行って育てたい……（夜明け前，荒 1977[1983:p.470]の例 105）

たしかにこれらは，いちおう人名詞がかざりになっている連語ではある．しかしながら，ここで《ゆずり相手のむすびつき》《はなし相手のむすびつき》をつくるへ格・マデ格の名詞には，実は人名詞らしくないものが多い．上の例でも(10)の「校務主任」は役割をしめす名詞ともいえる．渡辺(1963[1983])のへ格，井上(1963[1983])と荒(1977[1983])のマデ格であげられている他の例も，「神様へ純金

---

5) 《ゆずり相手のむすびつき》《はなし相手のむすびつき》は本稿で後述する《授与》《伝達》に相当する．

を献上する／神様へ冠をさしあげる／村山十吉なる者へ金を払う／古着屋へ売る／陸軍へ馬糧を納める／教会へ税を納める／養家へ買われて来る」「お島のほうへ言葉をかける／私の方へ救いをもとめる／かじやへ王冠をつくることを命じる／事務所へ……と言う／役場へ通知をだす／F村へ別れを告げる／知り合いの家へ葉書をだす／家へ電話をかける／近所へお侘びを云う／外国へ新刊書を注文する／そこへ一夜の宿を乞い求める」「当理髪店まで出場を申し込む」であり，人というよりは組織や集団さらには場所をしめす名詞がほとんどである．

このように，へ格・マデ格の名詞と動詞とのくみあわせには，純粋な人名詞と動詞とのくみあわせといえる例がきわめて少ない．加えて，つくりうる連語のタイプ（《ゆずり相手のむすびつき》《はなし相手のむすびつき》）にはへ格にのみ特有なものはなく，いずれもニ格の人名詞と動詞との連語のタイプに相当する（上のへ格名詞の連語はいずれもへ格をニ格にかえてもむすびつきの性質を変えることなくなりたつ）．そういったことから，本稿ではこれらについてもとりあげないことにする[6]．

3. 人格的存在としての人をしめす名詞と動詞とのくみあわせ

上で検討したことから，本稿で考察の対象とする連語は，人名詞の格形式としては，ニ格，カラ格，ト格，ヲ格の四つであり，そのうち人名詞が意志や感情や判断力をそなえた人格的な存在としての「人間」をしめしているものである．

- ニ格の人名詞と動詞とのくみあわせ　：弟に仕事をたのむ
- カラ格の人名詞と動詞とのくみあわせ　：友達から本をかりる
- ト格の人名詞と動詞とのくみあわせ　：親とけんかする
- ヲ格の人名詞と動詞とのくみあわせ　：子どもをおだてる

3.1. ニ格の人名詞と動詞とのくみあわせ

（1）　人になにかを伝える：　《伝達》

人に向けて言葉を発する言語活動をしめす動詞は，その言語活動の内容をしめすヲ格の抽象名詞およびそれを伝える相手をしめすニ格の人名詞とくみあわさって，人への伝達を表わす連語をつくる．

【{人}-ニ　{事}-ヲ　V(伝達)】

（発話の相手）（発話の内容）

「学生に思い出をはなす」「友だちに住所をつたえる」

伝達の言語活動をしめす動詞は，主として音声による伝達活動をしめすが，「先

---

[6] さらにマデ格については，マデ格の人名詞と動詞とが《はなし相手のむすびつき》をつくりうるのは，動詞が「申しでる，申しこむ，連絡する，伝える，知らせる」のようなものに限られている（井上 1963[1983:p.436]）という点で特殊である．

輩に礼状をかく，恋人に手紙をしたためる」のように，文字による伝達活動をしめす動詞もこの連語をつくる．

《人になにかを伝えることをしめす動詞》

・はなす，いう，うちあける，うったえる，おしえる，かたる，ぐちる，（愚痴を）こぼす，しゃべる，しらせる，たずねる，つげる，つたえる，いただす，とう，とく，のべる，ぶちまける，ほのめかす，わびる，// 告白する，謝罪する，白状する，説明する，報告する

・かく，かきおくる，したためる

「電話をかける」「電報をうつ」といった慣用的なくみあわせもニ格の人名詞とくみあわさってこの種の連語をつくる．「ぶつける」は具体物を他の具体物にあてることをしめす動詞だが，「（親に）不満をぶつける」のようにやや慣用的なくみあわせとのこの類の連語をつくる．

（2）　動作を行うことを相手に表明する：　《動作表明》

「ちかう，約束する」は，ヲ格の動作性名詞および相手をしめすニ格の人名詞とくみあわさり，ヲ格名詞のしめす動作を行うことを，主として言語によって相手に表明し約束することを表わす．なおヲ格の動作性名詞のかわりに形式名詞「コト」を使って「～することを」という形で動作がしめされることもある．

【{人}-ニ　{動作}-ヲ　V(動作表明)】[7]

（決意表明の相手）（表明する動作）

「後輩に支援を約束する」「両親に改心することをちかう」

《動作を行うことを表明することをしめす動詞》

ちかう，約束する[8]

この「ちかう，約束する」は，ト格の人名詞とくみあわさって《相互的態度》を表わす連語をつくることもできる（「友と再会をちかう」「クラスメートと文通を約束する」など．3.2 節の（2））．

---

[7] この類の動詞がヲ格名詞をとるとき，それは動作性名詞であるのが基本的な特徴であるが，ときに具体名詞をとることもある．ただし，その場合でも，その具体物に関係する動作を行うことを約束しているのであり，「こどもにお土産を約束する」は「お土産を買ってくることを約束する」ということを表わしている．

[8] 奥田(1968-1972 [1983:p.132])では，この「ちかう，約束する」を“意志的なむすびつきを表わす連語”をつくる動詞として，「たくらむ，はかる，もくろむ，おもいたつ，心がける，意図する，決心する，決意する」や「こころざす，めざす，企画する」とまとめている．そしてそのうえで，「ちかう，約束する」は“はなし相手をしめすに格の名詞でひろげられる”点でほかの動詞と異なるとされている．なお，「たくらむ，はかる」の類と「こころざす，めざす」の類とは，もくろむ動作が相手にむかうものであるかどうかに違いがあり，後者はそういった性質がきわめて乏しいという．

（３）言語活動によって動作を要求する：　《動作要求》

人に対して動作の実行を要求する言語活動をすることをしめす動詞は，言語活動の相手をしめすニ格の人名詞および要求の内容をしめすヲ格の動作性名詞とくみあわさって，動作要求のむすびつきを表わす連語をつくる[9]．

【{人}-ニ　{動作}-ヲ　V(動作要求)】

（要求の相手）（要求する動作）

「部下に調査を命じる」「孫に掃除をいいつける」「社長に賃上げを要求する」「後輩に欠席を禁じる」

《動作の実行を要求する言語活動をしめす動詞》

命じる，いいつける，訴える，うながす，お願いする，かけあう，乞う，しいる，すすめる，せがむ，せまる，そそのかす，たのむ，ねがう，のぞむ，はたらきかける，もとめる，よびかける // 期待する，希望する，強要する，禁止する，禁ずる，厳談する，催促する，さしずする，主張する，助言する，指令する，請求する，談判する，欲する，無理強いする，命令する，要請する

これらの動詞のうちには，要求する動作を具体的に表わすモーダルな引用節あるいはヨウニ節でひろげられた構造をとれるものが多い．

【{人}-ニ　〔要求内容を表わす引用節[10]／ヨウニ節〕　V(動作要求)】

（要求の相手）　（要求する動作の内容）

「後輩に荷物を運べと命じる」「選手に休むなと助言する」「買い物に行ってねと孫にいいつける」「部下に調査するよう命じる」

上の動詞はもっぱら動作要求的な言語活動をしめす動詞であるが，「言う，説く」「声をかける」など言語活動を広くしめす動詞や，「連絡する，伝える」のように何らかの情報を相手に伝えることをしめす動詞のなかにも，上の第二の構造をとることができるものがあり，言語活動による動作要求を表わす連語をつくることができる．

・言い聞かせる，言う，説く，声をかける，だだをこねる // 意見する

・手紙をやる // 合図する，電話する，連絡する

○「早く帰りなさいと言う」「父親に自転車を買ってほしいとだだをこねる」「あした８時までに出社するよう連絡する」

---

9) この類のくみあわせは，奥田(1960[1983:p.300])の“態度的な意味を含んだ言語活動”，奥田(1968-1972[1983:p.131])の“要求的なむすびつき”に相当する．

10) 要求する動作をしめす動詞は次のようなモーダルな形をとる．
「シロト／シナサイト／シテモヨイト／スルナト／シテハイケナイト／シテホシイト／シテクレト／シテクダサイト／シテネト／シロヨト／シタラト／シテハドウカト／シタホウガイイト」

さて，この《動作要求》の連語は，ニ格の人名詞とヲ格の動作性名詞を要素とする点で，先にみた《動作表明》の連語と同じである．しかしながら，両者はニ格の人名詞の性質が異なっている．すなわち，いずれも伝える「相手」ではあるが，《動作要求》におけるニ格の人名詞は，単に伝える相手であるだけでなく，要求する動作の潜在的・可能的な主体でもある（「先輩に支援をたのむ」において「支援」をする主体は「先輩」である）．

(12) 先輩に支援をたのむ ／ 学生に改心するよう命じる 《動作要求》

(13) 後輩に支援を約束する ／ 先生に改心することをちかう 《動作表明》

ところで，ヲ格の動作名詞ではなく，ヲ格の具体名詞およびニ格の人名詞とくみあわさって，動作要求的な連語をつくる動詞がある．

・せびる，（親に小遣いをせびる），あつらえる // 注文する（店員にワインを注文する），オーダーする，外注する，特注する，発注する，用命する

これらのつくる連語は，ヲ格名詞が具体物をしめしているのだが，その具体物をめぐるなんらかの動作（生産・授与など）を相手に要求することを表わしおり，その点で動作要求の連語に似ている[11]．

（4） 人に事物を提示する： 《提示》

具体物を相手の視覚内にさしだす動作をしめす動詞は，具体物をしめすヲ格の名詞とくみあわさるだけでなく，人の態度や気持ちや情報をしめすヲ格の抽象名詞ともくみあわさる．そして態度などを向ける相手をしめすニ格の人名詞とくみあわさって，物や態度や気持ちなどが相手に認識されるようにすることを表わす．

【{人}-ニ {事物}-ヲ V(提示)】

（提示の相手）（提示する対象）

「客に壷をみせる」「部下に数値目標をしめす」「先輩に感謝の気持ちをあらわす」「相手に不快感を表明する」「住民に賠償額を提示する」

《人に事物を提示することをしめす動詞》

しめす[12]，あらわす，つきつける，みせる，ゆびさす // 提示する，表明

---

[11] 動作要求の連語をつくる動詞のなかにも，動作性名詞だけでなく具体名詞ともくみあわさる動詞がある．そしてその場合も，ヲ格名詞のしめす具体物をめぐるなんらかの動作を相手に要求することを表わしている．注7も参照．

・すすめる（お茶をすすめる），せがむ（金をせがむ），たのむ（本をたのむ）小遣いをせびる），ねだる（人形をねだる） // 請求する（代金を請求する）

・[12] 奥田(1960[1983:p.265])では，「しめす，さす，ゆびさす，みせる」を“対象を相手の認識にあわせる活動を表現している動作的な態度のむすびつき”をつくる動詞としている．

する

（5）　人に何かを与える：　《授与》

人に何かを与えたり渡したりすることをしめす動詞は，与える相手をしめすニ格の人名詞および与える事物をしめすヲ格の名詞とくみあわさって，授与のむすびつきを表わす連語をつくる．「あげる，くれる」などいわゆる授与動詞をはじめ，次のような動詞がこの連語をつくる．

【{人}-ニ　{事物}-ヲ　V(授与)】

（授与の相手）（与える事物）

「後輩に荷物をわたす」「子供に規則を教える」「親にショックを与える」

《人に何かを与えることをしめす動詞》

・あげる，くれる，さしあげる，やる

・与える，あてがう，あずける，うる，うりつける，うりわたす，おくる，おごる，おさめる，教える，かえす，貸す，くばる，ささげる，さずける，しはらう，はらいさげる，はらう，ひきわたす，ふるまう，ほどこす，めぐむ，もどす，ゆずりわたす，ゆずる，よこす，わける，わたす

// 寄贈する，寄附する，供給する，献上する，交付する，支出する，支給する，貸与する，提供する，提出する

与える事物は，具体物であったり権利や資格や気持ちのような抽象的なものであったり物理的な刺激であったりするが，どんなものであれ，また，与えることが一時的であれ永続的であれ，なにかを人に与えるということは，それを受けた人がそれを有していない・感じていない状態から有する・感じている状態になるという意味での変化が生じる．相手に与える事物の種類によって，授与以外の種々の連語に相当するものとなりうる．とくに「与える」の場合に顕著であり，機能動詞的に用いられることも多い[13]．

「部下に〔命令／指令／指示〕を与える」→《動作要求》

「弟子に〔資格／権利／許可／承認〕を与える」→《社会的立場創出》

「親に〔感動／満足／ショック／よろこび〕を与える」→《感情変化》

「相手に〔励まし／誤解／声援／警告／夢〕を与える」→《意識変化》

（6）人に向かっていく態度をとる：　《対向的態度》

相手に対してなんらかの意識や感情をもってかかわっていくことを表わす動詞がニ格の人名詞とくみあわさると対向的な態度を表わす連語をつくる．

---

13) 村木(1991:pp.250-251，p.258)参照．なお，「与える」は，「壁に〔衝撃／打撃〕を与える」のように，物への接触を表わす連語もつくる．

【{人}-ニ　V(対向的態度)】

（態度をむける相手）

「親にあまえる」「客にかまう」「監督にさからう」「親にはむかう」

《人に向かっていく態度的な動作をしめす動詞》

・したがう，あまえる，かしずく，かまう，こたえる，こびる，たちむかう，たてつく，ついていく，つかえる，つくす，とつぐ，なつく，はたらきかける　//　いたずらする，応ずる，影響する，おじぎする，嫁する，応接する，関係する，干渉する，協力する，屈服する，敬礼する，呼応する，孝行する，作用する，妥協する，拍手する，服従する，奉仕する，味方する，目礼する //　（やさしく，きびしく，冷たく）する

・そむく，はむかう，さからう　//　反対する，抵抗する

・あたる，からむ，よりかかる

・会う，わかれる // 相談する // 距離をおく

この類の動詞には，相手に従順な態度でかかわっていくという性質のきわだつもの（「つかえる，したがう」など）や，逆に反抗的な態度でかかわっていくという性質のきわだつもの（「そむく，はむかう」など）もある．また，「あたる，からむ，よりかかる」は，具体物に付着するはたらきかけをしめす動詞が人に向かっていく態度的な動作をしめす意味を派生させて多義になったものである．なお，「しがみつく，近づく，ぶつかる，接触する」もそうみなせそうだが，人への態度をしめすのはまだ臨時的かもしれない．なお，「会う，相談する，距離をおく」はト格の人名詞とくみあわさって動作の相互性がきわだつ連語をつくることもある（3.2 節の（1））．

（7）　人にかかわって事物を自分のものにする：　《準奪取》

人から事物をえる動作をしめす動詞は，物の元の所有者（事物の奪取元）をしめすカラ格の人名詞とくみあわさる構造をとるが（3.3 節の(1)），動詞によっては，その構造だけでなくニ格の人名詞とくみあわさって，人から事物をえることを表わす連語をつくることのできるものもある．

【{人}-ニ　{事物}-ヲ　V(準奪取)】

（事物の奪取元）（奪取する事物）

「友達に辞書を借りる」「父にお年玉をもらう」「親にお小遣いを前借りする」

《事物を他から手に入れることをしめす動詞》

もらう，いただく，かりる，たまわる　// 前借りする

「友達に辞書を借りる」と「友達から辞書を借りる」との違いは微妙だが，構造のもつ意味から推しはかると，前者のほうが相手に向かっていくという意味あいが強いということだろうか．

（８）　人にかかわって情報や知識を自分のものにする：　《準聴取》

人から知識や情報をえる活動をしめす動詞は，知識や情報を発する人をカラ格でしめす構造をとるが（3.3 節の(２)），動詞によっては，発する人をニ格の人名詞でしめし，その人にかかわっていってその人のもつ知識や情報を得ることを表わす連語をつくることもある．

【{人}-ニ　{事}-ヲ　V(準聴取)】

（情報の奪取元）（奪取する情報）

「ともだちに試験範囲をきく」「先輩にテニスを習う」

《情報や知識を手に入れることをしめす動詞》

きく，うけたまわる，うかがう，おそわる，ならう，まなぶ

「ともだちに試験範囲をきく」と「ともだちから試験範囲をきく」との異同は，上の《準奪取》と同様デリケートな問題である．

3.2 ト格の人名詞と動詞とのくみあわせ

（１）人と相互的に関わりあう態度をとる：　《相互的態度》

複数の人が同時に互いに対して関わりあっていくことをしめす動詞は，相互に関わりあう相手をしめすト格の名詞とくみあわさって《相互的態度》の連語をつくる．

【{人}-ト　V(相互的態度)】

（相互動作の相手）

「ともだちと争う」「幼なじみと結婚する」

《人と相互的に関わりあうことをしめす動詞》

・あらそう，会う，うちあわせる，たたかう，わかれる，わたりあう　//　握手する，結婚する，けんかする，再会する，相談する，対戦する，鉢合わせする，文通する，離婚する // 距離をおく

・同居する，別居する

「ぶつかる，接触する，衝突する」など物との物理的な接触をしめす動詞も，ト格の人名詞とくみあわさると「上司とぶつかる，広報官と接触する，親と衝突する」のように，人との精神的な接触を表わすようになりこの類の連語になる．

上の動詞のうち，「会う，相談する」は，ニ格の人名詞とくみあわさって《対向的態度》の連語をつくる動詞でもあった（3.1 節の（６））．また，「距離をおく，わかれる」は，ニ格の人名詞ともカラ格の人名詞ともくみあわさって，一方向的な態度を表わす連語をつくることができる（「先輩〔と／に／から〕距離をおく」「うるさい親〔と／に／から〕わかれる」，3.1 節の（６），3.3 節の（３））．人と人との間の態度的な関係を，相互に同じように相手に関わりあっているととらえるか，一方が相手に向かったり相手から離れたりするという一方向的な面を強く

とらえるかということだろう.

（２）　相互動作を約束する：　《相互動作の約束》

二人の間に生じる相互的な動作をめぐって両者がその実現を約束あるいは確認することを表わす連語がある.「ちかう，約束する」など動詞は限られているが,それらが相互動作の相手をしめすト格の人名詞およびヲ格の動作性名詞とくみあわさる.

【{人}-ト　{相互動作}-ヲ　V(約束)】

（約束の相手）（約束の内容）

「幼なじみと結婚を約束する」「親友と再会をちかう」

《相互動作を約束することをしめす動詞》

ちかう，とりきめる，申し合わせる // 約束する

約束する相互動作が実際に行われることを表わすのは，上の《相互的態度》の連語である.

(14) 幼なじみと結婚を約束する → 幼なじみと結婚する

(15) 親友と再会をちかう → 親友と再会する

なお,「ちかう，約束する」は決意表明の相手を表わすニ格の人名詞ともくみあわさるが（3.1 節の（２)),そのときのヲ格名詞は，一方向的に相手に向けられる動作や態度をしめすのがふつうであり（「被害者に支援を約束する」「両親に改心をちかう」),この《相互動作の約束》における動作が相互的なもの（「結婚」「再会」）であることと異なる.

（３）　何かをめぐって人と交渉する：　《交渉》

二人の間である事をめぐって交渉することを表わす連語では,動詞は主として相互的な言語活動をしめすものであり,それが言語活動の相手をあらわすト格の人名詞，交渉の内容をあらすわすヲ格の事名詞とくみあわさる.

【{人}-ト　{事}-ヲ　V(交渉)】

（交渉の相手）（交渉の内容や目標）

・「担当者と解決策を話しあう」「店長と賃上げを交渉する」

・「先輩と首位をあらそう」「友だちと一番のりを競う」

《何かをめぐって人と交渉することをしめす動詞》

・話しあう，語り合う //　議論する，交渉する

・あらそう，きそう

これらの動詞のうち,「話しあう，交渉する」の類は，ある事柄をめぐって主として言葉によって相手とやりとりをすることを表わし,このときのヲ格の事名詞は「～ニツイテ」といいかえてもくみあわせの意味はほとんどかわらない．そ

れに対して「あらそう，きそう」のほうは，複数の人がヲ格名詞のしめすものを得ることをめざして相互に関わりあうことを表わす．そして，この場合のヲ格の名詞は「～ヲメザシテ」という形でいいかえられる．このように考えると，この二つの類は別々の連語とすべきかもしれないのだが，ここではまとめておく．

（４）人と事物を交換する：　《交換》

《交換》の連語は，具体物や情報などをだれかと交換することを表わす．動詞は事物を相手に与えるとともに別の事物を相手から受けとることを表わす．「とりかえる，売り買いする」のときには交換する対象は具体物であるのがふつうだが．それ以外の動詞は，具体物だけでなく抽象物をしめす名詞でもよい．

【{人}-ト　{事物}-ヲ　V(交換)】

（交換の相手）（交換する事物）

「弟とおもちゃをとりかえる」「恋人と手紙をやりとりする」

「友人と意見を交換する」「作家と契約をとりかわす」

《人と人との間で物を交換することをしめす動詞》[14)]

・とりかえる，売り買いする

・かわす，とりかわす，やりとりする // 交換する

3.3 カラ格の人名詞と動詞とのくみあわせ

（１）人から事物を手に入れる：　《奪取》

事物を他の人から手に入れることをしめす動詞は，カラ格の人名詞およびヲ格の事物名詞とくみあわさって，その事物を人から奪取することを表わす連語をつくる．

【{人}-カラ　{事物}-ヲ　V(奪取)】

（事物の奪取元）（奪取する事物）

「祖母からお年玉をもらう」「おばあさんから財布を奪う」「友達からチケットを買う」

《事物を他から手に入れる動きをしめす動詞》

・もらう，いただく

・あずかる，あつめる，うけとる，うける，うばいかえす，うばいとる，う

---

14) 奥田(1968-1972[1983:p.86])では，所有動詞の中の特殊なものとして，「とりかえる，かわす，とりかわす，交換する」があるとされ．「あきなう，売買する」もあわせてあげられているが（述べられていないが，おそらく相互的な動作である点で共通するからだと思われる），“これらの動詞でできている連語をひとつのカテゴリーにまとめあげるほどの材料はない．”として分析されていない．たしかに動詞の数はすくないが，“対象が主体の方へちかづいてくること”“対象が主体からとおざかっていくこと”（p.81）との双方が同時に行われることをしめす動詞として位置づけることができる．

ばう，える，かいあげる，かいいれる，かう，かりうける，かりる，こうむる[15]，さらう，しいれる，しぼりとる，せしめる，たまわる，とりあげる，とりかえす，とりたてる，とりもどす，とる，ぬすみとる，ぬすむ，まきあげる，ゆずりうける // 前借りする，調達する，借用する，相続する，収奪する，掠奪する，強奪する

これらの動詞のうち，「もらう，いただく，かりる，たまわる，前借りする」は，奪取する相手をしめすニ格の人名詞とくみあわさる連語をつくることもできる（3.1 節の（7））．

（2）人から知識や情報を手に入れる：　《聴取》

人から受ける言語活動をしめす動詞とその言語活動の内容をしめすヲ格の抽象名詞，そしてそれを発する相手をしめすカラ格の人名詞とからなるくみあわせは，人からの情報や知識の収集・入手活動を表わす連語をつくる．

【{人}-カラ　{事}-ヲ　V（聴取）】

（情報の奪取元）（奪取する情報）

「友達から試験範囲をきく」「先輩からテニスを習う」

《人から情報をえる動作をしめす動詞》

きく，うかがう，うけたまわる，おそわる，ききだす，ならう，まなぶ

これらの動詞のうち，「きく，うかがう，うけたまわる，おそわる，ならう，まなぶ」は，入手する相手をしめすニ格の人名詞とくみあわさる連語をつくることもできる（3.1 節の（8））．

（3）人のもとから離れる態度をとる：　《離反的態度》

なにかからはなれていくことを表わす動詞がカラ格の人名詞とくみあわさると，離反的な態度を表わす連語をつくる．それまで接していた相手，あるいは関係のある相手に対してなんらかの意識や感情をいだくことが直接間接の要因になって．相手から遠ざかったりはなれたりすることを表わす．

【{人}-カラ　V（離反的態度）】

（離れる相手）

「警官からにげる」「親から巣立つ」

《人のもとから離れる態度的な動作をしめす動詞》

にげる，巣立つ，とおざかる，（仲間から）ぬける，はなれる，わかれる // 距離をおく

15）「こうむる」は，人に対して積極的にかかわっていくことをしめすのではなく，もっぱら消極的に影響を受けることをしめす（「先輩から影響をこうむる」）．また，「初対面の人からやさしい印象を受ける」「相手から嫌な感じを受ける」なども同様．

3.4. ヲ格の人名詞と動詞とのくみあわせ

（1）　人をある社会的立場におく：　《社会的立場創出》

人の社会的立場の創出を表わす連語は，人をある社会的な立場においたり，なにかの役割を帯びた状態にしたりすることをしめす動詞が，ヲ格の人名詞とくみあわさり，必要に応じて，生じる立場や帯びる役割をしめす名詞のニ格あるいは「～トシテ」のかたちでひろげられる．

【{人}-ヲ　({立場・役割}-ニ/トシテ)　V(社会的立場創出)】

（立場を与える対象）（創出する立場や役割）

「新人を責任者に任命する」「英会話のできる人を秘書としてやとう」「投手をスカウトする」

《人をある社会的立場におくことをしめす動詞》

やとう，とりたてる　//　起用する，雇用する，推薦する，スカウトする，選任する，登用する，任官する，任命する，任用する，抜擢する

これらの動詞は，上の構造のほかに，職務や立場をしめすヲ格名詞とくみあわさることもできるのが特徴である．

【{立場・役割}-ヲ　V(社会的立場創出)】

（創出する立場や役割）

「アルバイトをやとう」「開発責任者を任命する」

上のようなもっぱら人をある社会的立場におくことをしめす動詞のほかに，「置く，かかえる」のように物の設置や把持をしめす動詞も，上のような連語構造をとることでこれらに準ずる動詞として働くことがある．

・（人を）置く，（人を）入れる，（人を）かかえる，（人を）とる

○「屈強な若者を用心棒として置く」「経験のある人を大工として入れる」「いろいろな国の人をコックに抱える」「企業人を就職担当職員としてとる」「新卒者を事務員としてとる」

○「用心棒を置く」「大工を入れる」「コックを抱える」「就職担当職員をとる」「事務員をとる」

さらに，物のグルーピングをしめす動詞がヲ格の人名詞とくみあわさり，必要に応じて，グルーピングしたあとの状態をしめすニ格の名詞でひろげられた連語もこの類に準ずるものである．

・組み合わせる，まとめる，わける // グループ分けする

【{人}-ヲ　({ｸﾞﾙｰﾌﾟ分けしたあとの状態}-ニ)　V(グルーピング)】

「ベテランと新人を組み合わせる」「子供たちを二組に分ける」

なお，「使う」も，ヲ格の人名詞とくみあわさり，必要に応じて，生じる立場や帯びる役割をしめす名詞の「～トシテ」やニ格のかたちでひろげられる点で

(「社長が姪を秘書として使う」など)，上の動詞と似ている[16]．ただし「使う」は，人を統括・支配してなにかをさせるというかかわりの全過程をいわば総括的・抽象的に表現している[17]．したがって，「使う」を要素とする連語は**《総括的な利用態度》**を表すとでもよぶことができる．ただしこの連語をつくるのはごくわずかな動詞であり，「使う」以外は現代語ではあまり用いられないので，連語のタイプとしてはとくにたてない．

【{人}-ヲ　({立場・役割}-トシテ/ニ)　V(総括利用)】

(総括的に利用する対象)

「学生を臨時職員として使う」「新入生を先発投手に使う」「部下を使う」

《総括的な利用態度をしめす動詞》

使う，使役する，役する

(2)　人をある社会的立場からはずす：　《社会的立場剥奪》

上の社会的な立場の創出といわば逆の，社会的立場の剥奪といった事態を表わす連語もある．社会的立場にある人をそこからはずすことをしめす動詞が立場や役割をしめすヲ格の人名詞とくみあわさり，さらにカラ格の名詞ともくみあわさることがある．人を社会的立場からはずすことをもっぱらしめす動詞は和語動詞には少なく，多くが漢語サ変動詞である．ただし，「おろす，はずす」など物をなにかからとりはずすことをしめす動詞がヲ格の人名詞とくみあわさってこの連語をつくることができる．

【{人}-ヲ　({立場・役割}-カラ)　V(社会的立場剥奪)】

(立場を奪う対象)　(剥奪する立場や役割)

「パート社員を解雇する」「彼を大統領から追放する」「彼を主役からはずす」

《人をある社会的立場からはずすことをしめす動詞》

おろす，くびきる，はずす //　解雇する，解任する，解放する，勘当する，釈放する，追放する，パージする，罷免する，免職する，離縁する

---

16) 「使う」はまた，ニ格の動作性名詞でひろげられることもある．「学生を市長調査に使う」「道具の運搬に後輩を使う」など．ただしこの場合も，ニ格名詞のしめす動作を行う要員としてヲ格でしめされる人を「使う」ことが表わされている．

17) 「使う」は，物をなにかある動作を実現させるための手段として扱うことを，一般化したレベルでしめす動詞である．「円をかくのにコンパスを使う」「通学に自転車を使う」での「使う」は具体的な動作を表わしているようではあるが，両者における動作は同じではなく個々に特有の動きを表わしている．「使う」はそういった個別の動作をいわば目的や意図の面から一般化してとらえてしめす動詞といえる．その点で，「(円を) 書く」「(大学に) 行く」などの動詞が一定の個別の動きをしめすものであるのと異なっている．「使う」のこういった語彙的な意味の特徴が人名詞とくみあわさるときも発揮されるのである．奥田(1960[1983:p.269])では，「つかう」を，“動作を態度の側面から特徴づけている動詞”のひとつとしている．

（３）　人をある場所に移動させる：　《社会的位置変化》

人の位置変化をひきおこすことをしめす動詞が，ヲ格の人名詞および，必要に応じてカラ格・ニ格・へ格・マデ格の場所名詞とくみあわさると，人をある場所から別の場所に移動させることを表わす連語をつくる．そしてこの移動は，本稿で考察対象としている人が人格的な存在としての人であることから，単なる空間的な位置変化というよりも，なんらかの社会的状態の変化をともなう移動という意味あいを帯びている．動詞としては，「よぶ，連れていく，派遣する，動員する」のようにもっぱら人を移動させることをしめすものもあるが，具体物の授受や移動をしめす他動詞が，多くこの構造をつくる．

【{人}-ヲ　({場所}-カラ)　({場所}-ニ/へ/マデ)　V(位置変化)】

（移動させる対象）（移動元の場所）（移動先の場所）

「記者を本社から現地に送る」「部下を支社に派遣する」

「友だちを家へよんでくる」「課長を部長室までよびつける」

「学生を講堂にあつめる」「二人連れを店によびいれる」

《人をある場所に移動させることをしめす動詞》

主体側から離れる方向への移動をしめすもの，主体側へ向かう移動をしめすもの，主体とともに移動することをしめすものをそれぞれ「派遣型」「招集型」「連れる型」とし，移動の方向がそれほど問題にならないものを「その他」として例をあげる．

・[派遣型]　（代理に）やる，あげる，追い返す，追い出す，帰す，送る，つかわす，戻す，（使いに）よこす　// 派遣する

・[召集型]　招く，引き入れる，引きずりこむ，引きずりだす，まねきいれる，まねきよせる，よびあつめる，よびいれる，よびだす，よびつける，よびよせる // 借りてくる，よんでくる // 動員する

・[連れる型] 連れこむ，連れだす // 連れていく，連れてかえる，連れてくる，連れてもどる // 連行する

・[その他]　あるめる，移す，出す，通す

人の社会的位置変化を表わす連語には，移動させる主体側のなんらかの目的のもとで，人をある動作を行うために必要な場所に移動させるというものがある（「部下を調査のため現地に派遣する」「取材のため記者を支社から現場に送る」「長男を親戚の家に使いにやる」）．これらはなんらかの任務を帯びた位置変化であり，社会的状態変化を伴う移動あるいは社会的な配置といってもよい．そういったくみあわせは，複文構造の使役文の従属節でしばしば用いられて，相手にある動作を行わせるためにそれにふさわしい場所に移動させることを表現する（「部下を現地に派遣して調査させる」「子供を連れてきて手伝わせる」）．

（4）　人の生活環境を変化させる：　《社会的環境変化》

上の《社会的位置変化》の連語も，上で述べたように，ある場合には社会的な状態変化のひきおこしのようになるのだが，カラ格・ニ格の名詞が場所名詞でなく組織名詞であるとそれが明瞭になり，社会的な状態，いわば環境変化のひきおこしを表わす連語となる．人の社会環境の変化をひきおこす働きかけをしめす動詞がヲ格の人名詞とくみあわさり，さらに，もとの社会環境や新たな社会環境を表わすカラ格・ニ格の組織名詞でひろげられる．そして，人をそれまでとは異なる社会環境においたり，もとの環境からはなれさせたりすることを表わす．この連語は，《社会的位置変化》を表わす連語の抽象化したものだといえる．

動詞としては，もっぱら人の社会的環境変化のひきおしをしめす動詞はほとんどなく，「入れる，ひきぬく」のように物の設置や除去をしめす動詞や「預ける，うばう」のように物の授与や奪取をしめす動詞，あるいは「寄宿する，入団する」のように人の社会環境の変化を表わす自動詞の「V-(サ)セル」形などがこの連語をつくる．

【{人}-ヲ　（{組織}-カラ）　（{組織}-ニ）　V（社会環境変化）】

（環境を変化させる対象）　（もとの環境）　（新しい環境）

・「娘を共学校から女子大に入れる」「子供を施設に預ける」「息子を寮に寄宿させる」「息子をサッカーチームに入団させる」

・「息子を悪い仲間からひきはなす」「選手を退部させる」「優秀な投手をチームにひきぬく」

《人をある生活環境におくことをしめす動詞》

・（学校に）入れる，（施設に）預ける，（チームに）加える // 寄寓させる，寄宿させる，入社させる，入隊させる，入団させる，入部させる，入寮させる，

・うばう，ひきぬく，ひきはなす // ぬけさせる // 退社させる，退団させる，退部させる，脱退させる

（5）　感情の変化をひきおこす：　《感情変化》

感情変化のひきおこしを表わす連語は，人に影響をおよぼしてその感情状態に変化を生じさせる働きかけをしめす動詞とヲ格の人名詞とのくみあわせである．この連語をつくる動詞にはふつうの他動詞は少なく，感情の動きをしめす自動詞の「V-(サ)セル」形や感情形容詞の連用形に「する」のついた形およびその「V-(サ)セル」形がこの類の連語をつくる中心になっている．

【{人}-ヲ　V（感情変化）】

（感情変化をひきおこす対象）

「友達をおどろかす」「親を悲しませる」「子供を喜ばせる」

《感情変化のひきおこしをしめす動詞》

・くるしめる，きずつける，元気づける，ちからづける，なぐさめる

・あきさせる，いらだたせる，おこらせる，おどろかせる，かなしませる，こまらせる，くるわせる，たのしませる，たかぶらせる，なやませる/なやます，ひがませる，ひねくれさせる，まごつかせる，まどわせる，まよわせる，よろこばせる，わずらわせる // 安心させる，興奮させる，混乱させる，失望させる，心配させる，心服させる，増長させる，退屈させる，動揺させる，憤激させる，満足させる

・いやがらせる，うらやましがらせる，うれしがらせる，おもしろがらせる，さびしがらせる，はかながらせる

・いきいきさせる，いらいらさせる，ぎょっとさせる，どぎまぎさせる，ぞっとさせる，はっとさせる，びっくりさせる

・くるおしくする，くるしくする（くるしくさせる），わびしくする // いこじにする，しあわせにする，卑屈にする，みじめにする（みじめにさせる），夢中にする（夢中にさせる），愉快にする（愉快にさせる）

（6）　意識の変化をひきおこす：　《意識変化》

意識変化のひきおこしを表わす連語は，人に影響をおよぼしてその意識変化を生じさせるかかわりを，個々の具体的な動きのレベルでではなく意識に影響をあたえていく態度的なかかわりとして表わす．心理的なかかわりという点で，（5）の《感情変化》に近いのだが，いくつかの点で異なるので分けることにする．

【{人}-ヲ　V（意識変化）】

（意識変化の対象）

「友だちをあざむく」「人を慰労する」「妹をいじめる」

《意識変化のひきおこしをしめす動詞》[18]

・あざむく，いじめる，おいつめる，おびやかす，ごまかす，さいなむ，じらす，だます，ばかす，やりこめる // 慰労する

・納得させる，反発させる

この《意識変化》の連語と上の《感情変化》との違いとして，まず，動詞の形態・意味の面の特徴がある．《感情変化》のむすびつきをつくる動詞は他動詞が少なく，感情の動きをしめす自動詞の「V-(サ)セル」の形や感情形容詞に「する」のついた形がほとんどだったが，《意識変化》のほうは，言葉や態度によってそ

18) これらのほかに，「（人の）気をひく，（人の）関心をそそる」というくみあわせもこのタイプに準ずるものである．

の人をある意識に誘導することしめす他動詞がむしろ多い[19]．また，ヲ格の人名詞は，《感情変化》では感情をいだく人を，《意識変化》では意識をもつ人を表わし，前者ではもっぱら感情変化をひきおされる人であるのに対して，《意識変化》のほうでは，意識変化をひきおこされる人であるだけでなく，意識に変化が生じることで何らかの意志的な動作を行う気持ちを誘発され，意志動作の主体となることもある人である．なお，このような性質の反映として，これらの動詞が従属節述語となり，人に意志動作を行わせることが主節で表現される使役文（「母親をあざむいて金をおくらせた．」「客をだまして不良品を買わせた．」）や，これらの動詞の受身形が従属節動詞となり，人が行なった動作が主節で表現される複文（「親類にあざむかれて権利書を渡した．」「おいつめられて会社の金に手をだした．」「店員にだまされて粗悪品を買わされた．」）がしばしば見られる．

（７）　動作を誘導する態度をとる：　《動作誘導的態度》

動作誘導的な態度を表わす連語は，主として言葉によって相手をある動作に誘導する動きを態度の側面から表わす．相手をある動作に導くべく主として言葉によって積極的にかかわっていくことをしめす動詞が，誘導する対象としての人をしめすヲ格の人名詞とくみあわさる．そしてさらに誘導の内容を具体的にしめす引用節あるいはヨウニ節でひろげることができるのが特徴であり，この特徴は3.1節の（３）《動作要求》と同じである．

【〔誘導内容を表わす引用節／ヨウニ節〕　{人}-ヲ　V（動作誘導的態度）】

（誘導する動作の内容）　　（動作誘導の対象）

「早く食べなさいと子供をせきたてる」「もっとやれやれと下級生をけしかける」「自首するよう弟を説得する」

《動作誘導的な態度をしめす動詞》

・うながす，あおる，いいくるめる，おしえる，おだてる，おどかす，おどしつける，おどす，くどきおとす，くどく，けしかける，さそう，すかしなだめる，せきたてる，そそのかす，問いただす，ときすすめる，ときふせる，はげます // 威嚇する，鼓舞する，指揮する，説得する，煽動する，督励する，鞭撻する，籠絡する

---

[19] 奥田(1960[1983:p.269])は，“対象にたいしてはたらきかけて，変化をあたえる全過程を，態度の側面から特徴づけている単語のくみあわせ”の類をもうけ，「いたぶる，いじめる，かわいがる，いたわる，もてなす，あやす，世話する，あしらう，かまう，うらぎる，ごちそうする，たすける，すくう，つかう，もちいる，あつかう，とりあつかう，のこす」のような“動作を態度の側面から特徴づけている動詞”がこのくみあわせをつくるとしている．なお，奥田(1968-1972 [1983])では，このくみあわせおよびこれらの動詞については類としてまったくふれられていない．

・駆りたてる，駆る，追いつめる

これらのうち「うながす，けしかける，そそのかす」は，「どうぞおすわりくださいと客をうながす」「万引きしろと下級生をそそのかす」というこの《動作誘導的態度》の連語をつくるとともに，「客に着席をうながす」「下級生に万引きをそそのかす」という《動作要求》(3.1 節の（３）) の連語もつくる．そして，《動作誘導的態度》では，引用節／ヨウニ節の表わす動作の主体はヲ格名詞であり，《動作要求》では，ヲ格名詞のしめす動作の主体はニ格名詞である．つまり前者では｛人｝が誘導の対象として，後者では｛人｝が要求の相手として表現されているのだが，この二つの連語が表わすむすびつきはかなり似ている．奥田(1968-1972[1983:p.60])でも，これに相当する現象について，“を格とに格とが，動作の主体をあらわすということで，文法的なシノニムになる．”と述べている．

なお，「おしえる」は，この類の連語をつくるとともに，「彼に住所をおしえる」のように《伝達》の連語（3.1 節の（１）) もつくる．

（８）　評価的な態度をとる：　《評価的態度》

評価的な態度のむすびつきの連語は，相手が行ったことや相手のつねの様子・言動について何らかの感情や評価的な気持ちをもって相手を遇することを表わす．上の（７）の《動作誘導的な態度》とは異なり，相手に動作を促すことは直接的にはもくろまれておらず，まずは既成・既存の事態についての評価を態度で表明するものである．評価的な態度のむけられる対象を表わすヲ格の人名詞とくみあわさるほかに，評価の内容を具体的にしめす引用節でひろげられる．引用節でひろげられる点は《動作誘導的な態度》と同じだが，《評価的態度》の引用節は，既に行われた言動に言及する，あるいはそれを前提として以降の言動に注文をつけるというのがふつうであるのに対して，《動作誘導的な態度》のほうは相手が既に行った動作や相手の性質そのものに言及するものではない．また，《評価的態度》のほうはヨウニ節ではひろげられないことも相違点である．

【(〔評価を表わす引用節〕)　｛人｝-ヲ　Ｖ(評価的態度)】

（評価の内容）　　（評価的態度の対象）

「他人をけなす」「よくがんばったねと子供をほめる」「だめじゃないかと部下を叱る」「いつも仲がいいなと二人を冷やかす」

《評価的な態度をしめす動詞》

ほめる，いさめる，いましめる，からかう，けなす，こきおろす，しかる，せめる，たたえる，問いただす，とがめる，なじる，ののしる，冷やかす，もちあげる //　賞讃する，罵倒する，非難する，批判する

上の動詞のほか，「言う，話しかける」など伝達動作をひろくしめす動詞も，評価や感情の対象となる事態に言及する引用節を伴ってこの構造をとることが

できる（「よくがんばったねと言う」「うまく描けているなと話しかける」）.

（9）　人を育てる：　《育成》

人を育てたり助けたりすることをしめす動詞が，育てたり助けたりする対象をしめすヲ格の人名詞とくみあわさると育成のむすびつきを表わす連語となる.

【{人}-ヲ　V(育成)】

（育成の対象）

「子供をそだてる」「両親をやしなう」

《育成をしめす動詞》[20]

育てる，しつける，助ける　やしなう // 介助する，世話する

ただし，この連語をつくる動詞には，対象をしめすヲ格名詞として人だけでなく生物や植物もとることができるものも少なくない（「〔馬を／植物を〕育てる」「犬をしつける」）. この類の連語における人は，人格的存在としての人という性質が低く生物としてのヒトに近いともいえ，そうだとすれば本稿の考察対象として典型的なものではないということになる.

（10）　人をなにかから守る：　《保護》

人を他からその人にむけられる事物から守ることを表わす連語は，なにかを守ることをしめす動詞がヲ格の人名詞をくみあわさり，必要に応じて人に向けられる事物を表わすカラ格の事物名詞でひろげられる.

【{人}-ヲ　({事物}-カラ)　V(保護】

（保護の対象）（保護の対象にむけられる事物）

「ともだちをかばう」「国民を災害から守る」

《保護をしめす動詞》

まもる，かばう，すくう // 警護する，保護する

これらの動詞のうち，「かばう」はもっぱらヲ格の人名詞とくみあわさるが，他の三つはそれに限らず物や場所をしめす名詞ともくみあわさる（「〔こどもを／樹木／森林を〕保護する」）. 人格的な存在としての人について考察する本稿の対象からはのぞくべきかもしれない[21].

---

[20] この《育成》および次にみる《保護》の連語をつくる動詞には，具体的な一回一回の動作をしめすというよりも，人に対するかかわりの全過程を目的や意図の面から抽象してしめすものが多い．その点で，「使う」（3.4 節の（1））や「あざむく，慰労する」（3.4 節の（6））と似た性質といえる（注 17，注 19 参照）.

[21] 奥田(1960[1983:p.267])で，“第三のもののはたらきかけから対象をまもることを表現している動作的な態度のむすびつき”をつくる動詞としてあげられているものであり，そこでは人名詞に限るとはされていない．なお，奥田(1968-1972 [1983])では，これらの動詞については類としてまったくふれていない.

3.5. 各類の連語タイプの整理

以上，3.1 節から 3.4 節で，ニ格，ト格，カラ格，ヲ格の人名詞と動詞とのくみあわせの型をみてきた．ここにそれらの構造型を一覧としてまとめ，それぞれの型の動詞を 1 例ずつあげておく．

●ニ格の人名詞と動詞とのくみあわせ

伝達　【{人}-ニ　{事}-ヲ　V(伝達)】　はなす
動作表明　【{人}-ニ　{動作}-ヲ　V(動作表明)】　ちかう
動作要求　【{人}-ニ　{動作}-ヲ　V(動作要求)】　命じる
提示　【{人}-ニ　{事物}-ヲ　V(提示)】　しめす
授与　【{人}-ニ　{事物}-ヲ　V(授与)】　あげる
対向的態度　【{人}-ニ　V(対向的態度)】　従う
準奪取　【{人}-ニ　{事物}-ヲ　V(準奪取)】　もらう
準聴取　【{人}-ニ　{事}-ヲ　V(準聴取)】　きく

●ト格の人名詞と動詞とのくみあわせ

相互的態度　【{人}-ト　V（相互的態度)】　結婚する
相互動作の約束【{人}-ト　{相互動作}-ヲ　V(約束)】　約束する
交渉　【{人}-ト　{事}-ヲ　V(交渉)】　交渉する
交換　【{人}-ト　{事物}-ヲ　V(交換)】　とりかえる

●カラ格の人名詞と動詞とのくみあわせ

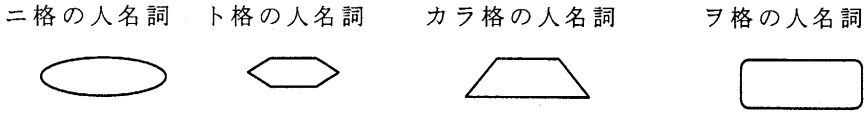
奪取　【{人}-カラ　{事物}-ヲ　V(奪取)】　もらう
聴取　【{人}-カラ　{事}-ヲ　V(聴取)】　きく
離反的態度　【{人}-カラ　V(離反的態度)】　にげる

●ヲ格の人名詞と動詞とのくみあわせ

社会的立場創出　【{人}-ヲ　({立場}-ニ/トシテ)　V(立場創出)】　やとう
社会的立場剥奪　【{人}-ヲ　({立場}-カラ)　V(立場剥奪)】　追放する
社会的位置変化　【{人}-ヲ　({場所}-カラ)　({場所}-ニ/ヘ/マデ)　V(位置変化)】　やる
社会的環境変化　【{人}-ヲ　({組織}-カラ)({組織}-ニ)　V(社会環境変化)】　学校に入れる
感情変化　【{人}-ヲ　V(感情変化)】　くるしめる
意識変化　【{人}-ヲ　V(意識変化)】　あざむく
動作誘導的態度　【({誘導内容を表わす引用節/ヨウニ節})　{人}-ヲ　V(動作誘導的態度)】　うながす
評価的態度　【({評価内容を表わす引用節})　{人}-ヲ　V(評価的態度)】　ほめる
育成　【{人}-ヲ　V（育成)】　育てる
保護　【{人}-ヲ　({事物}-カラ)　V（保護)】　まもる

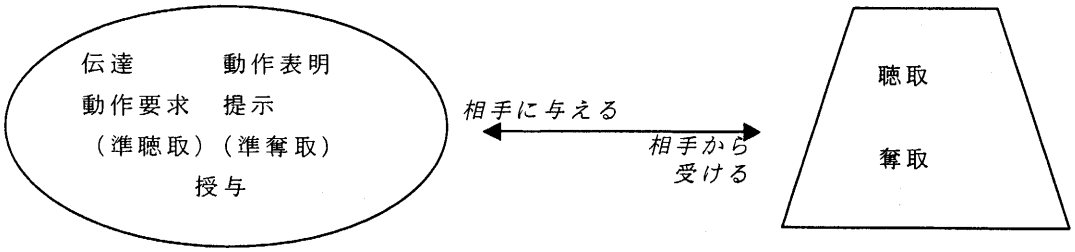
4. 連語の間の関係

ここでは，3章での考察をふりかえりつつ，連語の間の相互関係を考えてみる．以下ではそれぞれの格の名詞を次のような形でしめすことにする．



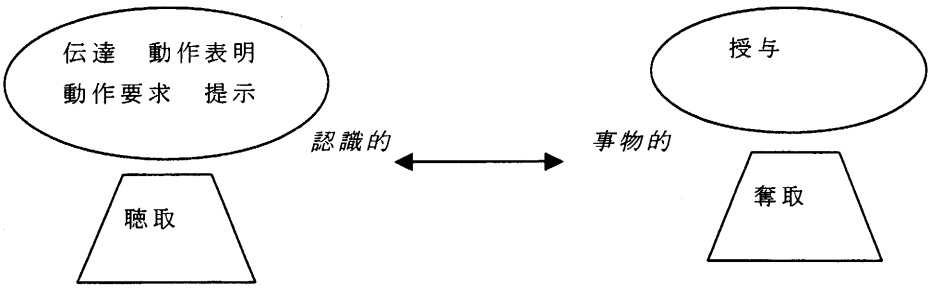
（1）相手になにかを与える動作と相手からなにかを受ける動作

相手になにかを与える動作を表わす連語には，《伝達》《動作表明》《動作要求》《提示》《授与》があり，相手からなにかを受ける動作を表わす連語には，《聴取》《奪取》がある．そして，やりとりされるなにかが向かう方向が逆であるこれらは，やりとりの相手を，前者ではニ格の名詞で後者ではカラ格の名詞でしめすという点で対立している．ただし，《聴取》《奪取》の連語をつくる動詞のうちには，相手をニ格の名詞でしめして《準聴取》《準奪取》の連語をつくることができるものがある（「先生〔から／に〕聞く」「兄〔から／に〕もらう」）．したがって，《聴取》《奪取》と《準聴取》《準奪取》とは，同じく受ける動作の相手（情報や事物の奪取元）を，前者ではカラ格で，後者ではニ格で表わすという関係になっている．ただし，このように構造が異なるとすれば，後者のニ格名詞は必ずしも“受ける動作の相手”というのではない構文的な意味をになっていると考えるべきかもしれない．



（2）事物の所有権のやりとりと認識のやりとり

上の（1）でみた，《伝達》《動作表明》《動作要求》《提示》《授与》と《聴取》《奪取》の二種は，それぞれの類の内部において，相手との間での所有権のやりとりが問題になる動作か否かで対立がある．前者の《授与》と後者の《奪取》は事物の所有権のやりとりが問題になる動作であるのに対して，前者の《伝達》《動作表明》《動作要求》《提示》と後者の《聴取》はそうではなく，相手とのおもに言語活動をもとにした，いわば認識面のやりとりである．



（3）《伝達》と《動作表明》《動作要求》と《提示》

この（1）と（2）をあわせ考えると，相手に何かを与える動作でかつ言語活動をもとにした認識面のやりとりを表わす連語として，《伝達》《動作表明》《動作要求》《提示》の四つがとりだされる．これらの関係はどうなっているだろう．それぞれ3章でみたように次のような構造をとる連語である．

伝達　【{人}-ニ　{事}-ヲ　V(伝達)】　（後輩に予定をはなす）

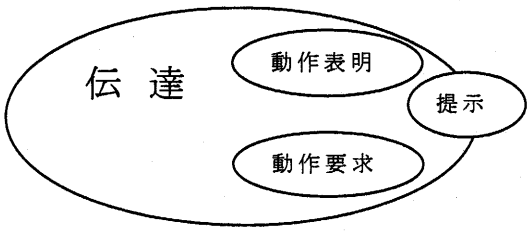
動作表明　【{人}-ニ　{動作}-ヲ　V(動作表明)】　（後輩に援助を約束する）

動作要求　【{人}-ニ　{動作}-ヲ　V(動作要求)】　（後輩に掃除を命じる）

提示　【{人}-ニ　{事物}-ヲ　V(提示)】　（後輩に〔地図を／目標を〕示す）

まず，《伝達》《動作表明》《動作要求》と《提示》について考える．《伝達》《動作表明》《動作要求》は，いずれも広い意味で言語によって何かを相手に伝えることを表わす点で共通する．それに対し《提示》は，相手に向けるのが必ずしも言語によるものだけでなく視覚にうったえるものであってもかまわない．このことを反映して，ヲ格名詞が，《伝達》類ではもっぱら抽象名詞であるのに対して，《提示》では具体名詞でもかまわない．《提示》は，ヲ格名詞が抽象名詞でも具体名詞でもかまわないという点で，《伝達》であるとともにやや《授与》に近いといえる（ただし，《授与》とは異なり所有権のやりとりはともなわない）．

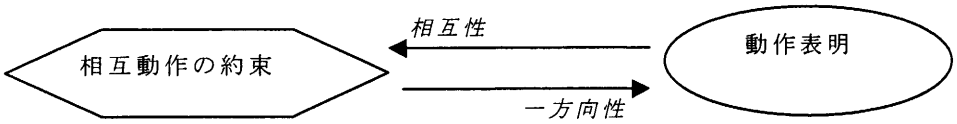
次に，ヲ格名詞が抽象名詞である《伝達》《動作表明》《動作要求》についてみると，《動作表明》《動作要求》はそれぞれ，自身のとる動作の表明，相手のとる動作の要求であることから，ヲ格名詞が抽象名詞のうちで動作性の名詞である点で《伝達》と異なっている．そして，《動作表明》と《動作要求》とは，動作を行う主体が，伝える人自身であるか伝える相手であるかにおいて異なっている．



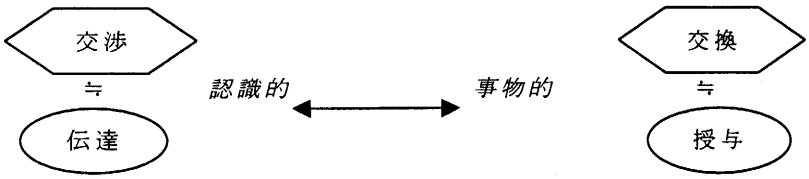
（4）相互的な動作と一方向的な動作

ト格の人名詞が要素である四つの連語は，いずれも動作の相互性がかかわるむすびつきである．そしてそのうえで，《相互動作の約束》と《交渉》《交換》《相互的態度》とで性質が異なっており，他の連語との対立関係も異なっている．

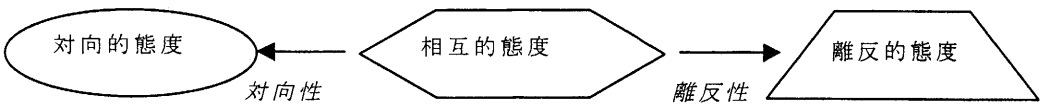
まず，《相互動作の約束》は，ニ格の人名詞を要素とする《動作表明》と関係する．両者はいずれも基本的には言語的なかかわりを表わしている点で共通する．そして 3.2 節で触れたように，《相互動作の約束》ではヲ格名詞が相互動作をしめしていてそれは主体と相手とがともに行う動作である（「友だちと文通を約束する」「友と再会をちかう」）のに対して，《動作表明》でのヲ格名詞は，主体が相手に向かって行う動作である（「被害者に支援を約束する」「両親に改心をちかう」）という点で異なっている．



次に，《交渉》と《交換》とは，ヲ格名詞のしめすものをめぐって相互に同じように関わりあっていくことを表わす点で共通し，認識面のやりとりが問題になるか事物の所有権のやりとりが問題になるかで対立している．そして，認識面か事物面かという対立である点で，（2）でみた《伝達》類と《授与》との対立に似ている．



一方，《相互的態度》は，主体と相手との間になりたつ自動詞的なかかわりである．そして，その相互性がくずれると，主体が相手に向かう態度を表わす《対向的態度》と主体が相手から離れる態度を表わす《離反的態度》との二つの方向に移行する．それらをつなぐものとして「先輩〔に／と／から〕距離をおく」のようなものがあることをみた．そして，相手に向かう態度を表わす《対向的態度》と相手から離れる態度を表わす《離反的態度》とは，それぞれの相手をニ格名詞とカラ格名詞とでしめして対立しており，その点で（1）でみた《伝達》《聴取》類と《授与》《奪取》類との対立に似ている．



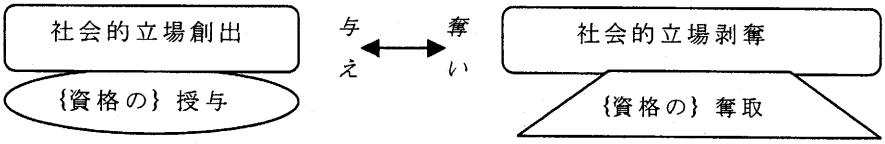
（5）　《社会的立場創出》と《社会的立場剥奪》

ここまでにみてきたものは，ニ格・カラ格・ト格の人名詞がかざりになる連語の間での相互関係であったが，ヲ格の人名詞についてはどうだろうか．ヲ格名詞をかざりにする連語相互の間の関係，および，ニ格・ト格・カラ格の人名詞をかざりにする連語との関係を考えてみる．

まず，ヲ格の人名詞と動詞とのくみあわせを，社会的な立場や役割をしめす名詞でひろげることのできる二つの連語タイプとして《社会的立場創出》と《社会的立場剥奪》がある．それぞれ，前者は，社会的な立場や役割をしめすニ格の人名詞あるいは「{人}-トシテ」のかたちによって，後者は，カラ格の人名詞によってひろげられる．そして，《社会的立場創出》では，人をある社会的な立場や役割を帯びた状態に変えることを，《社会的立場剥奪》では，人を元の社会的な立場や役割を奪われた状態に変えることを表わす．つまり両者の表わす変化は異なる方向への状態変化といえる．

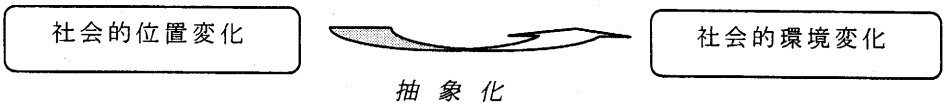
さらに，《社会的立場創出》の表わす，人を新たな社会的立場や役割を帯びた状態に変化させるというかかわりは，人にその社会的立場を与えるという《授与》と近く，《社会的立場剥奪》の表わす，人を元の社会的立場や役割の備わっていない状態に変化させるというかかわりは，人から元の立場や役割を奪うという《奪取》と近い．

(16) 太郎を 編集長に 任命する　≒　太郎に 編集権を 与える
(17) 彼を 主役から おろす　≒　彼から 主役の役割を うばう



（6）《社会的位置変化》と《社会的環境変化》

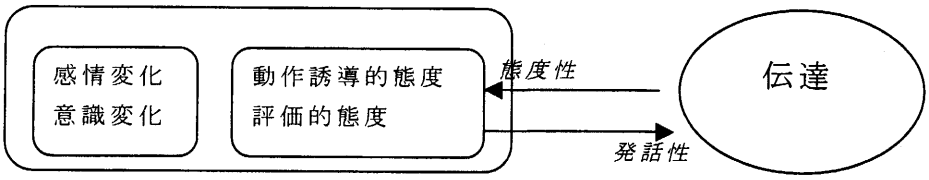
《社会的位置変化》と《社会的環境変化》の連語は，ヲ格の人名詞のほかにカラ格・ニ格の名詞がくみあわさることができる．そして前者のそれが場所名詞であるのに対して後者では組織名詞である．このような構文的な性質があることから，《社会的環境変化》は《社会的位置変化》の抽象化したものだと考えられる．



（7）《感情変化》《意識変化》と《動作誘導的態度》《評価的態度》，そして《伝達》

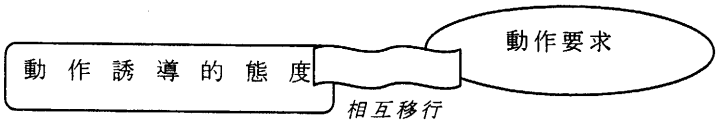
これらのうち《感情変化》《意識変化》と《動作誘導的態度》《評価的態度》の連語はいずれも，人の感情や意識といった心理面に働きかけたりかかわったりすることを表わすものであり，その点で大きくまとめることができる．そしてその中で，《動作誘導的態度》と《評価的態度》とは，主として言葉によって人を遇し，ときにはその人を直接的・間接的に何らかの動作に導くことを表わすのに対して，《感情変化》と《意識変化》とは，必ずしも言葉によらずさまざまなかたちで人を刺激してその感情や意識の変化をもたらす（動作を導くことは，まずは含まない）ことを表わすという点で異なっている．

《動作誘導的態度》と《評価的態度》のむすびつきは，主として言葉によって人を遇するわけだから，言葉を発するという面を強く表現するならば，《伝達》のむすびつきになっていく．すなわち，「早く食べなさいと子供をせきたてる」「よくがんばったねと子供をほめる」という動作的態度・評価的態度は，現実の発話面をとらえて表現すればそれぞれ「早く食べなさいと子供にいう」「よくがんばったねと子供に話しかける」という《伝達》の連語となる．



（８）《動作誘導的態度》と《動作要求》

動作誘導的態度の連語（「どうぞおすわりくださいと客をうながす」）と動作要求の連語（「客に着席をうながす」）とは，誘導あるいは要求してやらせる動作の主体が，前者ではヲ格の人名詞のしめす人，後者ではニ格の人名詞のしめす人である．ひとつの動詞がつねに両方の型の連語をつくるというわけではないが，連語の表わす内容は似ており，連語のタイプとして相互の移行関係をみることができる．



（９）連語のタイプの間の関係

以上，人名詞と動詞からなる連語のいくつかのタイプをとりあげ，それらの間にみられる対立・相関・移行などについて考えてきた．それらをまとめると，おおよそ次ページに図示するような関係があるといえそうである．そして，相互

関係の重要な二つの軸として，“認識性と事物性”，“相手に与えるか相手から受けるか”ということがとりだせると思われる．この図にうかがえるように，ニ格・ト格・カラ格・ヲ格の人名詞と動詞からなるさまざまな連語には，同じ格の人名詞と動詞との連語の間にだけでなく，異なる格の人名詞と動詞との連語の相互にもいろいろな関係があり，全体として体系をなしている．

ただし，人名詞と動詞との連語の中で，この相関図に示せなかったものがある．いずれもヲ格の人名詞をかざりとする次の連語である．

(a)《社会的位置変化》《社会的環境変化》

(b)《育成》《保護》

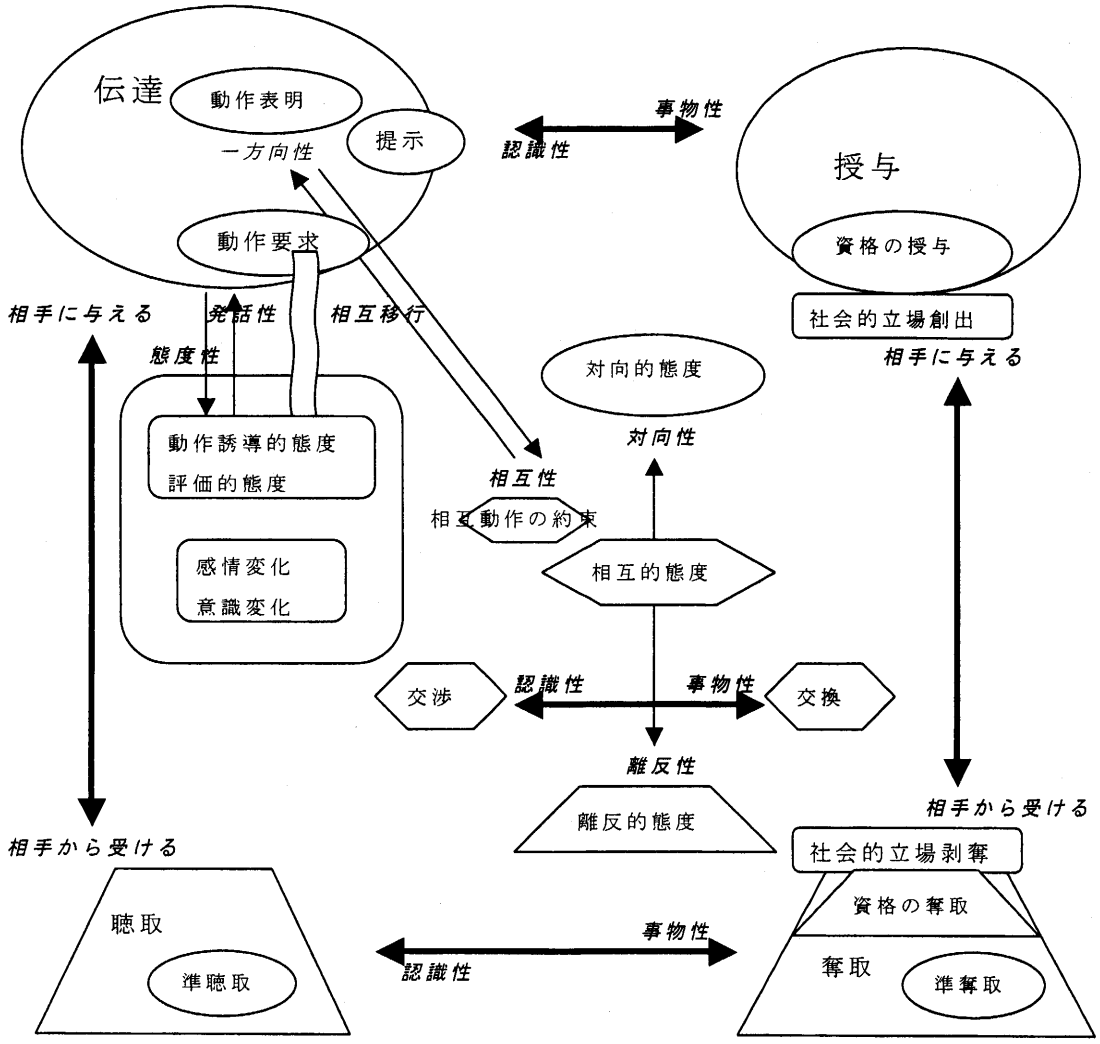
このうち（a）の２つの連語は，先に（６）で，《社会的位置変化》の連語の抽象化したものが《社会的環境変化》だと考えられると述べたように，この２つの間の関係はみいだせるのだが，それ以外の連語タイプとの関係はうまくみいだせない．また，(b) の２つの連語は，3.4 節の（９）(10) でもふれたように，人格的存在としての人という点で問題のあるものであった．実は (a) の《社会的位置変化》《社会的環境変化》も，基本的には人の空間的な位置変化を前提とするものといえることから，人名詞の人格性に問題のある連語ともいえる．

そうだとすれば，考察対象とする連語の範囲を，ヲ格の物名詞と動詞との連語にもひろげて考えることが必要なのかもしれない．ヲ格だけでなくニ格・ト格・カラ格の名詞の場合もあわせて，あらためて広範に体系性をさぐる必要がある．

5. おわりに

本稿では，名詞と動詞とからなる連語について，特定の格の名詞と動詞というくみあわせではなく，特定の意味の名詞と動詞というくみあわせを対象に考察した．ニ格・ト格・カラ格・ヲ格の人名詞をかざりとする連語の構造的なタイプをとりだし，同じ格の名詞と動詞とからなる連語の諸タイプの間にみられる相互関係を確認するとともに，異なる格の名詞をかざりとする連語の諸タイプとの間にひそむ対立・相互・移行などの関係もさぐろうと試みた．「１．はじめに」でも述べたように，これは言語学研究会編(1983)に成果がおさめられている奥田靖雄氏の連語論とは異なるものだろう．しかし，このような方法で考察してみることによって，名詞と動詞からなる連語の体系性をひろく明らかにすることもできるのではないだろうか．少なくとも本稿では，人名詞と動詞との連語を考察することによって，対人的なさまざまな行為の相互関係を反映するものとしての連語の体系性がいくらかみえてきたように思う．理論的にはもちろん方法論的にもまだ模索の段階であり，また，実例による実証的な裏づけもきちんとしていない段階での研究ノートである．今後じっくり考えていきたい．

＜人名詞と動詞との連語のいくつかのタイプのあいだの関係＞



（注）上の図形の形は，名詞のそれぞれの格形式を表わす．

ニ格の人名詞　ト格の人名詞　カラ格の人名詞　ヲ格の人名詞

【資料】非人格的な存在としての人・事物をしめす名詞と動詞とのくみあわせ

人名詞が非人格的なヒトとみなされる連語には，典型的には大きく二つの場合がある．ひとつは，いわゆる物扱いの場合である．「ぼんやり歩いていてこどもにぶつかった．」における「こどもにぶつかる」は，「ぼんやり歩いていて電柱にぶつかった．」の「電柱にぶつかる」の表わす《物への接触》のむすびつきが基本（土台・もと）にあって，それに擬したものとして捉えられている．すなわち，「こどもにぶつかる」における「こども」は物として扱われているといえる．

もうひとつの場合は，人か物か事かの対立がいわば中和している場合である．「通行人に気づく｛人｝」は，「植木に気づく｛物｝》」や「物音に／失敗に気づく｛事｝》」と比べて，いずれかが基本（土台・もと）にあるという関係ではなく，ニ格の名詞が人であっても物（具体物）や事（抽象物）であっても，ニ格名詞と「気づく」との連語の表わすむすびつきは，等しく“対象の認知”である．いまの例はニ格の名詞であったが，ヲ格の名詞の場合にも同様であり，たとえば，「こどもをたたく」と「ドアをたたく」は前者の例であり，「母を思いだす」「故郷をおもいだす」「約束をおもいだす」は後者の例である．そして後者の最たるものが，奥田(1960[1983:p.210]，1968-1972[1983:p.78])のいう「一般的な作用動詞」がつくるむすびつき（「学生をかぞえる」「いすをかぞえる」「回数をかぞえる」など）である．ただし，人が物扱いされている連語と，人か物か事かの対立がない連語とは必ずしもはっきり分けられるわけではない．したがって，この一覧ではとくに両者を分けずに，名詞の格の形ごとにそれぞれの連語を列挙することにする．それぞれの類において，かざり名詞がどのような構文的意味であるかを記すことにする．

（ア）ニ格の名詞と動詞とのくみあわせ

《接近の対象》　〔親に／親の腕に／電柱に〕しがみつく　〔子供に／塀に〕ぶつかる

《付着先》　〔弟に／弟の背中に／植木に〕水をかける　〔子供に／人形に〕服をきせる

《存在・所有・内在のありか》　〔太郎にこどもが／教室に窓が〕ある　〔花子に／車に／制度に〕悪いところがある

《出現物のありか》　〔花子に子供が／制度に特別枠が〕うまれる　〔太郎に心配事が／政治に空白が〕できる

《認知物のありか》　〔彼にやさしさを／答案にまちがいを／制度に欠陥を〕みつける

《心理的な態度の対象》　〔先輩に／留学に〕あこがれる　〔友達に／知識に〕たよる

《認知の対象》　〔通行人に／まちがいに〕気づく　〔大臣に／事情に〕通じる

《論理的な関係の対象》　〔こどもに／いそがしさに〕かこつける
《客観的な関係の対象》　〔親に／桜に／江戸時代に〕似ている　〔彼女に／事件に〕かかわる
《認識の対象》　〔先生に／風景に〕親しみを感じる　〔彼に／火鉢に〕なつかしさをおぼえる

（イ）ト格の名詞と動詞
《相互接触の対象》　〔通行人と／人の腕と／自転車と〕ぶつかる
《比較の対象》　〔兄と／輸入品と／新制度と〕くらべる

（ウ）カラ格の名詞と動詞
《構成要素》　〔男子学生から／十部屋から〕なる〔集団／旅館〕

（エ）ヲ格の名詞と動詞
《接触の対象》　〔こどもを／こどもの身体を／荷物を〕かかえる　〔妹を／妹の腕を／ひもを〕ひっぱる　〔弟を／弟の頭を／机を〕たたく
《移動する対象》　〔けが人を／薬品を〕病院にはこぶ　〔生徒を／机を〕隣の部屋へうつす　〔病人を／資材を〕山頂からおろす　〔園児を／ごみを〕廊下にだす　〔けが人を／ピアノを〕外へかつぎだす　〔こどもを／布団を〕押入れにいれる　〔子供を／布団を〕押し入れからひっぱりだす
《感性的な認識の対象》　〔選手を／樹木を／風景を／外を〕ながめる　〔恋人を／カレンダーを〕みつめる，　窓から〔子供を／庭木を／空を〕みる　〔ともだちを／住所を／事件を〕知る
《知的な認識の対象》　〔恋人を／故国を／平和を〕思う　〔山田選手を／薬品を／情勢を〕分析する　〔弟を／天候を〕心配する
《発見の対象》　〔逃亡者を／遺失物を／解決策を〕みつけだす　〔行方不明者を／金鉱を／まちがいを〕発見する　〔恋人を／時間を／視線を〕意識する
《再生活動・創造的な再生活動の対象》〔母を／故郷を／約束を〕おもいだす　〔祖先を／昔を／経験を〕おもいおこす　〔担当者を／公式を／風景を〕おぼえる
《感情的な態度の対象》　〔親を／故郷を／学生時代を〕なつかしむ　〔先輩を／火事を／失敗を〕おそれる　〔友達を／野菜を／説教を〕きらう　〔長男を／資格を／平等を〕重んずる
《知的な態度の対象》　〔彼を天才だと／作品を贋作だと〕みぬく　〔友達を立派な人だと／証言を正しいと〕判断する　〔彼を独裁者に／城を白鷺に／現代を元禄時代に〕たとえる
《名づけ的な関係の対象》　〔子供を京子と／新幹線をのぞみと〕名づける　〔兄

をまさちゃんと／新制度をエコプランと〕よぶ

《関係づけや調査の対象》　〔太郎を兄と／国産品を輸入品と／日本社会を西欧と〕くらべる　〔犯人を／公園を／原因を〕調査する

《一般的な作用動詞がつくる種々な動きの対象》　〔係員を／机を／予算を〕増やす　〔社員を／いすを／仕事を〕減らす　〔学生を／柱を／回数を〕数える　〔係員を／ペンを／予定を〕かえる　〔部下を／机を／政治を〕動かす　〔患者を／テレビを／制度を〕なおす　〔ともだちを／車を／供給を〕とめる

（オ）デ格の名詞と動詞とのくみあわせ

《ことがらの原因》　〔夫で／借金で／商売で〕苦労する

《ものをみたす材料》　〔人で／花で／仕事で〕うまる

参考文献

荒正子.1975[1983].「から格の名詞と動詞とのくみあわせ」,『教育国語』40,41,（言語学研究会編 1983:pp.397-425 に再録）

荒正子 1977[1983]「まで格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』50 号（言語学研究会編 1983:pp.455-471 に再録）

井上拡子 1963[1983]「格助詞「まで」の研究」（1963 のガリ版刷りを言語学研究会編 1983:pp.427-454 に所収）

奥田靖雄 1960[1983]「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」（1960 のガリ版刷りを言語学研究会編 1983:pp.151-279 に所収）

奥田靖雄 1962[1983]「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」（1962 のガリ版刷りを言語学研究会編 1983:pp.21-149 に所収）

奥田靖雄 1967[1983]「で格の名詞と動詞とのくみあわせ」（1967 のガリ版刷りを言語学研究会編 1983:pp.325-340 に所収）

奥田靖雄 1968-72「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」『教育国語』12,13,15,20,21, 23, 25,26,28.（言語学研究会編1983:pp.281-323に再録）

言語学研究会編 1983『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房

鈴木重幸・鈴木康之 1983「編集にあたって」『日本語文法・連語論（資料編）』むぎ書房,pp.3-19.

早津恵美子 2003「動作要求を表す英語動詞をめぐって―辞書記述の観察―」『松田徳一郎教授追悼論文集』研究社, pp.469-484

松本泰丈 1985「連語論の考えかた」『言語生活』406（松本泰丈 2006『連語論と統語論』至文堂,pp.13-15 に再録）

宮島達夫 1972「動詞の意味と文法的性質」『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版（宮島達夫 1994『語彙論研究』むぎ書房, pp.337-393 に再録）

宮島達夫 2005「連語論の位置づけ」『国文学 解釈と鑑賞』第 70 巻 7 号. 至文堂
村木新次郎 1991『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
渡辺友左 1963[1983]「へ格の名詞と動詞のくみあわせ」(1963 のガリ版刷りを言語学研究会編 1983:pp.341-352 に所収)
渡辺義夫 1966[1983]「カラ格の名詞と動詞のくみあわせ」(1966 のガリ版刷りを言語学研究会編 1983:pp.353-395 に所収)